

2 2年生



愛のカタチ

加藤拓三

僕が感じたことは、自分が考えてアクシヨンをしない又何も変わらないことです。

『人に優しく、信頼されること』が僕の小学校六年生からの人生目標です。

この漠然とした目標は、この一年半で変化しました。ひとつ屋根の下で生活することで人とのコミュニケーションの重要性を強く感じた。

また、手作りのお米や農作物にも水や除草、それに僕の気持ちもグツと入れた。物作りでは特に興味を持ったのが竹細工です。お箸、クローゼット、竹ぼうき、タグ、竹炭、棚、竹液、キーホルダー、笛入れ、バチ入れ、鉛筆立て、竹笛、竹アンティーク、釣り竿、竹藪、茶杓、竹花瓶、竹口ウソクスタンドなどを竹細工し、気合いと気持ちを含めた。

大事にしたいことは、楽しく生きていくために苦しくても、辛くても、一つ一つチャレンジして自分の目の壁を切り拓くことの大切さです。

僕は大好きな祖母のために、僕の魂と愛を含めて、抹茶の茶碗、竹藪、茶杓を作っています。その一杯のお茶に、僕が学んできた二年間分の土臭さや愛情、挫折、根性友情、気合い、豊かな心、人や物の貴重さ



礼儀作法、自然のすばらしさと僕の気持ちを注いで、飲んで頂きたいことが愛のカタチだと考えています。

かっちゃん

「活着」した生き方

朝元 尊

たとえば「生き方の教科書」があるならば、本の要所に蛍光ペンを塗り、赤線を引き、書き込んだりする。こうして本がカラフルになると、そこは覚えた気になってしまふ。一旦そう思ってしまうと、もう一度そこをやり直そうとする気持ちは薄れてしまふ…。

生きてきた時間の中で、どれだけ自分は



理解しているだろうか。どれだけ身につけているのだろうか。出来たつもりではないか…。

田んぼ作業で覚えた「活着」という言葉が印象に残る。活着とは、さし木・つぎ木・苗植えなどをした後に根付いて成長することを意味する。田んぼに稲の苗を植える。引っ張ればすぐに抜けてしまふ。しかし、一週間ほどすると根は落ち着き、苗が土を掴んだ感触が得られる。それが「活着」である。

自然界で「活着」できなければ、淘汰される…。

「実るほど 頭を垂れる 稲穂かな」いや、まずはゆっくり急いで「活着」を、自分に言い聴かせている。

無題

伊藤 光

ここに来て一年七ヶ月、長いようであつという間に時がすぎていきました。太鼓を打ったり、走ったり、この自然の中でぽつぽつしたり、そんなことをしていく中で少しずつ物事を考えるようになり、一つ感じたことがあります。それは僕のことを応援してくれている人達のことです。それは、僕は何度かここを辞めようと思ったことがあります。その度支えてくれる人達がいました。でもいろいろありその人達と連絡がとれなくなってしまうました。その時は自分のバックグラウンドが無くなってしまったような気分です、生活にも集中できなくなりとても中途半端になってしまいました。稽古もせず、心もここにあらざとゆうかんじでした。そうなった時とても周りに迷惑をかけていたと思います。でもその時は周りのことは全く考えていませんでした。みなさん本当にすみませんでした。僕は応援してくれている人達との関係がうまくいかなくなってしまつて、はじめてその人達が本当に大切なんだと思いました。こ





れから先の人生でも研修生活のように投げ出したくなるようなことが何度もあると思います。でもここで経験したことを無駄にしないよう支えてくれる人達をだしじに、悔いの無いように全力で頑張っていきたいです。

今まだ連絡をとっていない人達、近々連絡しようと思います。ごめんなさい。

「今」思うこと

桜井佑樹

太鼓を好きでよかったと思う。そしてここに来れて幸せだなあと感じる。

太鼓してなかったら今頃何してたんだろう。想像できないなあ。

とりあえず今日までやれてこれたのは、僕を支え、応援してくれた家族、友人等。...



色んな人のおかげ。本当にありがとっ!!

この生活もあと二カ月。目いっぱい楽しんでやろう。振り返るのは終わった後。今は前を向いて突き進むのみ!! 自分と向き合い、相手を思い、太鼓、踊りにあけくれ、でも、ちよっとゆるみながら。そんな毎日を過ごそう。

最後に去年も書きましたが、応援されるの大好きです。応援してください。これからもよろしくお願いします!!

僕の宝物

高橋勅雄

佐渡でできた僕の宝物。それは、佐渡で出会った、今じゃ親友と呼び合える友が僕の宝物です。

この二人に初めて会ったのは、八月の地元の夏祭り。ガラのよくない二人なので僕は、怖くて一言もかけられなかった事を覚えていますが。九月から始まる鬼太鼓の稽古中もなかなか声をかけるコトができなくて、二人の鬼をずーっと見ながら真似する事しかできませんでした。

ある時ふつとなんの抵抗もなく二人に近づくとコトができて、いろいろな話をしているうち、お互いのコトをよく知るようにになり、会ったたびにいつも一緒にいて時間を忘れて話をしたり、するようになりました。

二人には鬼の打ち方を教えてもらう以外にも、命懸けで一つのコトに向かう気持ちや、一つのコトに賭ける思いや鬼太鼓への誇りの大きさを教えてもらいました。それを証明するかのようになり、祭りでは、体が動かなくなるまで鬼を打ち誇りを賭けて踊っている友の姿全部が僕にとって感動的で衝撃的でした。二人が身を以て教えてくれた事を胸に置いてこれからも生きていきたいと思っています。それから、二人の鬼太鼓と僕の太鼓でやっている事が違っていると



ほりぐちいくみ25才!

堀口育美

私は研修所に来て、自分の事をよく知ったような気がします。当初は舞台上立つ事を夢みていましたが、「選ばれし者の世界」という事をだんだん感じてきたり、自分の体の加減が分からずに故障してしまったりもして一時はとても悩んだ事もありました。



でも反対に、私に向いている事や、自分らしさのようなものが分かってきました。私は料理が好きです。食べる事も好きです。一年生の頃はみんなの誕生日になると必ずお菓子を作ってお祝いしてました。みんなに美味しいと言ってもらえた時は単純だけど、とても嬉しいです。

以前の仕事経験もあり、私は人が喜んでくれるような事を考えるのが好きです。そして、研修生になつて大きく気付かされた事がひとつあります。それは親の愛情の深さです。自分の意志でここへ来たにもかかわらず、「帰りたい」と言っても絶対



秋の音楽室で。

小畑端美

『ようこそ佐渡へ!! 島のモンでも訪れることのないようなココ柿野浦へようこそいらっやいました!! 高いお金を払って、ワクワクしてやってきたところがココデス!! 十年程前まで若首中学としてココへ入んの方々がみんな学んだ学校がココです。私たちが日頃お世話になっている方々の若き日の熱き思ひがしみ込んでいます。そしてココ十年間というものは、私たち研修生の学び家です。』

今鼓童メンバーの堀つばささんたちから、この岩中で研修生活を送っています。今年でちょうど十年目なんです。私たち研修生の熱き思ひも、十年という歴史の中でこの岩中にしみ込んでいます。

そして今日!! 二〇〇五年九月二一日、みなさんがいらっやいました。海を渡りこんなところまで本当によくいらして下さ

に怒らず、いつでも親は私の味方でいてくれました。親孝行しなくてはいけない年なのに、金銭的にも迷惑をかけ、母はよく手料理をクール便で送ってくれたりもしました。無条件で与えてくれる親の愛ってすごいと思います。

これからは今まで受けたいっぱい愛情を、今度は私が返す番です。

修了後は地元に戻り、何か人と関わることができて自分らしい仕事をみつけないと思っています。そして研修所で学んだ事、変われた自分を大切に、育み、美しく生きていくことが私の目標です。まずは調理学師免許の取得を目指しています。

いました。

ここはもうみなさんの学び家、そしてみなさんの家なのです。ひとつ屋根の下、いつたどんな物語りが生まれるのでしょうか。みなさん一人ひとりの熱き思ひが作る五日間。その瞬間瞬間がこの岩中にしみ込んでいくと思つとワクワクします。

私たち研修生は主に食事係としてみなさんと一緒にココで生活させていただきま

す。太鼓も料理も人間も未熟な私たち十人ですが、栄一さんとみなさんが作りあげる熱き思ひの鼓童塾二〇〇五の成功を心から祈っています。

いたらないところばかりですが、何なりとお申しつけ下さい。そして心ゆくまで、ココでの非日常をお楽しみ下さい。どうぞ誰にも、何事にも遠慮なんていりません!! どうぞ心の窓全開で、ドキドキワクワク三〇〇%満喫して下さい。素敵な五日間になりますように!!

そう!! 今日人生の新たな歴史のはじまりです!!

もしも、ココでの暮らしに疲れたときは床にねそべって大きく深呼吸してみして下さい。ココで学んだ大勢の熱き思ひが、きっとあなたにパワーをくれるはずです!!

鼓童塾生さんをお迎える朝。私は音楽室(塾生さんの居室)の黒板にこう綴りました。何度も読み返してはワクワクしました。

あれからこの部屋に来るたびに黒板をながめています。あの日の朝のワクワクに五日間の思い出がしみ込み、塾生さんからの熱いメッセージがびっしりと加えられた黒板。何度見ても、心があたたかくなり涙が出ちゃいます。

ただただ塾生さんに気持ち良く、満喫して欲しかっただけの私でした。ところが終わってみれば、私にとっても忘れられない大切な時間、出会いです。私の方が塾生さんからきもちいい、うれしい言葉や心をたくさんいただいたしまいました。そして今だに塾生さんからのあたたかいお便りやおいしい味が残り少ない研修生活を盛り立ててくれています。

私が研修所に来て初めて出会ったものに茶の湯があります。一年半勉強してきた「茶の湯の心」「おもてなしの心」が、こんな実をつけてくれたのでしょうか。「茶の湯とはただ湯をわかし、茶を点てて飲むばかりなる事と知るべし」この言葉が心にひびき、そして奥ゆかしく美しく、大きいものだと実感しています。

今日、十一月四日、朝の掃除にて。作文×切りのこの日、とつとつこの黒板を消すことになった。偶然なのか、音楽室掃除は私ひとり。そしてこれを書く。(えっ?! 掃除は...!?)



今、胸の中にしまいました。きっとこの空気も岩中にしみ込んでいくんだなあ。と、しみじみしている私の目の前にまっさらな黒板。その顔は、次のエピソードをワクワク、心待ちにしているかのようでした。



絆

津村和宏

私は三宅島で生まれ育ち、幼少時代から兄弟三人、父より太鼓を教えこまれてきました。

研修所での目標は鼓童の舞台メンバーになることでした。しかし、それよりも三宅島の伝統芸能を継承し守っていくことのほうが自分の進むべき道なのではないのだろうかと考えました。

研修所では太鼓や踊り、歌などの稽古はみんなの気持ちがあつことも合わないこともあり、悩み、そして次のステップに進んでいくものだと思います。他人と気持ちを合わせることの難しさを実感し、とても勉強になりました。



家族で地元の三宅の太鼓を叩くときは四人の気持ちが一つになるので、合わないということは一度もありませんでした。よく父に三宅を叩くときは三宅島の祭りを思い出し常にその雰囲気を感じるな、と言われ続けてきましたが、その重要さがやっと解ったような気がします。

研修生活終了後は三宅島の伝統芸能を継承し、父のような太鼓打ちを目指し、日々勉強に励みたいと思います。

自分の音

中込健太

私は小学生の時から太鼓を叩いていますが、「なぜこんなにも太鼓なのか」と研修所にきて考えました。いろんな理由はあると思いますが、自分は太鼓の「音」に一番心をひかれています。一人ひとりが太鼓を叩いている時、音がスッと納得する音が出る時があります。また、音がしっくりこないなあと感じる時があります。こういう事を自分が無意識に感じているのはおもしろい。小木おけさをおどっている時太鼓に煽動されるように人がおどっているように感じられたり、鬼太鼓おどり手が音の鳴っている太鼓の前に立つと人がかわったようになつたりするのを見たり、自分も面をつけておどった時おどりが音に入っていく感じがした。そういう無意識に心を引く揺られる感じの太鼓がすごく好きになって、自分は太鼓のもつ力をまだまだ見ていなかったと思いました。今まではただ楽器として太鼓の良い音を探そうとしていたり、自分の気持ちをめっちゃくちゃにたたきつけてしまい、「いたい音」が出てしまう時がありました。ある時太鼓との関係をもっと考えてみたら...?とアドバイスをうけてなるほどと思ひ、今は自分から一方的にぶつけていくのではなく、太鼓

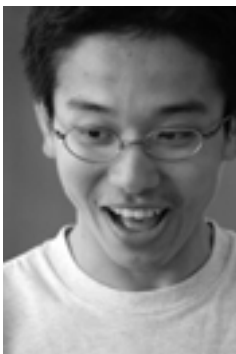


ある日の瞬間

高野智之

ある日の夕方何気なく気分転換がしたくて、研修所を出て、柿野浦の集落におりた。いつもと変わらない静かな集落をトボトボ歩き、海に出て、海を眺めた。

「何で太鼓を叩いているんだろう」



フツと思ったと同時に、これまで出会ってきた人達の事も思い出した。どの人達も太鼓や音楽を通して出会った人ばかり。

「そうか、僕は人と出会うために太鼓を叩いているのか。」

ここまで本当に色々な人達に支えられてきたんだなあ。佐渡に来てもらった皆さんの出会いをしてきた。

僕は本当に幸せものだなあ。

だから、後、残りの短い生活を自分のためだけに、今まで出会ってきた人達のために頑張る夢をつかもうと思つた。

自分が好きな音楽を太鼓で表現していく、自分が必要とする、あるいは自分を必要としてくれる人達と出会う。そんな人生を歩みたいと思つたある日の夕方。